

六甲・淡路島断層帯の新たな調査研究に基づく審議の結果について

平成 18 年 3 月 14 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

地震調査研究推進本部は、「地震調査研究の推進について ―地震に関する観測、測量、調査及び研究の推進についての総合的かつ基本的な施策―」（平成 11 年 4 月 23 日）を決定し、この中において、「全国を概観した地震動予測地図」の作成を当面推進すべき地震調査研究の主要な課題とし、また「陸域の浅い地震、あるいは、海溝型地震の発生可能性の長期的な確率評価を行う」とした。

地震調査委員会では、この決定を踏まえつつ、これまでに陸域の活断層として、98 断層帯の長期評価を行い公表した。

六甲・淡路島断層帯の評価は平成 17 年 1 月 12 日に公表しているが、その後、兵庫県によって実施された平成 16 年度地震関係基礎調査交付金に基づく調査結果が明らかになった。

地震調査委員会ではこの調査結果について審議したが、これまでの長期評価を見直すべき新たな知見は得られていないと判断し、評価の改訂は行わないこととした。

なお、審議の結果については新たに追補としてとりまとめた。

六甲・淡路島断層帯の評価（追補）

（説明）

・活動時期（地形・地質的に認められた過去の活動）について

兵庫県（2005）¹は、神戸市須磨区一ノ谷地点でトレンチ調査を実施した。このうち第1トレンチでは断層が確認でき、A-Cの各層が断層により切られ、D層以降の堆積物がこれらを覆う形でほぼ水平に堆積している。これらの堆積物は細礫－中粒砂主体であり、不規則に径10cm前後の礫が散在する。兵庫県（2005）は、D層の腐植質層から14－15世紀、その上位のE層上面の腐植質層から13－15世紀、さらにE層を覆うF層上面の腐植質層から16－17世紀の¹⁴C年代値が得られていることから、約600年前以前に活動があったと推定している。

しかしながら、断層を覆うD-Fの各層から得られた¹⁴C年代値にばらつきが認められ、いずれの層からも最も新しい¹⁴C年代値として16－17世紀を示す試料が得られている。トレンチに露出している堆積物は主に急傾斜の谷壁に由来する崩壊堆積物からなり、このことから、トレンチ壁面に認められる腐植質層は現地で生成されたものと、再堆積したものの双方が含まれていると考えられる。兵庫県（2005）はそれらのうち、13－15世紀を示す年代値だけを用いて最新活動時期について議論しているが、このような堆積環境の場合、13－15世紀を示す年代値は再堆積した試料から得られたものである可能性があるとは判断できる。

したがって、最新活動時期は13世紀以後17世紀以前と考えるのが妥当であるが、このような堆積環境からみて、積極的に活動時期を限定することはできないと判断した。

¹ 兵庫県（2005）：「平成16年度地震関係基礎調査交付金 六甲・淡路島断層帯に関する調査成果報告書」。兵庫県，1-70.